

増地博士と遺稿「工業經營論」

室谷賢治郎

戦争は數多くの貴重な生命と財産とを瞬く間に喪失せしめた。それは第一線の戦闘に参加した陸海空軍將士の生命や、銃砲機器艦船施設等を損耗せしめたのみならず、本土に在つた文化擔當者とその所産をも一朝にして犠牲に取去つた。わが經營經濟學界の至寶増地庸治博士の逝去と、博士の最後の瞬間まで肌身を離さず護られた原稿とは、學者の文化財を危く蕩盡せしめようとした悲劇的運命の一つを示すものである。

昭和二十年三月十日、この日は大東京の holocaust とも名狀すべきか、歴史上嘗て見ざる猛火が十萬の生靈を一舉にして殫め盡して了つた。その時、増地博士は本所の御自宅附近で隣組の人々を勵ましつつ鎮火に敢闘されなければ、遂に身心消磨してあはれ再び起つ能はざるに至つたのである。この間博士の安否を氣遣ふ門下生の

一隊は、日夜を舍かず搜索に當つたが、漸く十四日の夕刻、河畔に横はる冷い遺骸として博士を發見せざるを得なかつた。遺骸と共に見出されたものに、一束の原稿があつた。この原稿こそは、疎開先の國立の御別宅に保管されてゐた原稿と相合して、博士の遺著「工業經營論」の第一編を成すものであるが、水に濡れた一枚一枚は遺骸の傍らで、近親者及び門下生等によつて丁寧に體温で乾かされたといふ悲痛限りなき事實譚を藏するのである。

いま遺著となつた右の「工業經營論」の紹介の筆を執るに際し、生前に於ける博士の業績を一涉り回顧して見たい。大正八年三月、舊東京高等商業學校專攻部の學窓を出られるや、博士は元住友總本店へ入り、調査係を擔當し、半歳を経て住友製鋼所に轉じ、主として原價計算の事務に従はれた。その後、昇格した母校東京商科大學の助手に任ぜられたのは大正十年四月のことであるが、既に住友在職の二年間大阪高等工業學校講師として、工業經濟の講義を擔當されたことがある。十二年三月文部省在外研究員としてドイツに向はれたが、その前の置土産に二部の譯書がある。一はシュモラーの名著「一般國民經濟學原理」の中の企業の章を抄譯した「企業論」(大

正十年下出書店發行。同改譯版は大正十五年同文館發行。)であり、二はリーフマンの好著「企業形態論」(大正十一年同文館發行。横原覺氏と共譯)の全譯である。二書とも專攻部時代に於けるゼミナールの恩師上田貞次郎博士の校閲を経たもので、上田博士の序文がある。ドイツで主としてペルリン商科大學のニックリッシュ教授に師事された増地助手は、十四年夏歸朝せられると同時に、東京商科大學附屬商學専門部教授に任ぜられ、兼ねて同大學助教授に任ぜられ、間もなく滯歐中の土産を處女作として出版された。「經營經濟學序論」(大正十五年同文館發行)が即ちそれだ、わが國に於て經營經濟學の名辭を冠する著書の嚆矢である。

越えて昭和四年には増地教授の經營經濟學に關する一般概説的勞作として「經營經濟學」が改造社版の經濟學全集の中に收められ、同年更に單行本「經營要論」(巖松堂發行。昭和十六年全訂)が公にされた。昭和五年千倉書房刊行の「商學全集」中に教授執筆になる「企業形態論」が世に送られ、別著「商業通論」(昭和七年)が同全集中の一卷をなした。昭和九年東洋出版社刊行の「會計學全集」には教授は「經營財務論」の一卷を擔當せられ、昭和十一年の「我が國株式會社に於ける株式分散と支配」

(同文館發行)に就ての實證的研究と相俟ち、商學博士の學位を授與せられる基礎を作られた。「株式會社」(昭和十二年、巖松堂發行)と題する大作は、その精華と見らるべきものである。

既にして東京商大の正教授に累進せられた増地博士は東京帝國大學教授並びに文部省教學官を兼ね、日本經營學會(大正十五年創設)の常務理事を勤め、極めて多忙の日常を過されつつも、學問の探求と普及とのためには寸暇を惜み、無益に時間を徒費するが如きことは少しもなかつた。さればその後に至つても、「商業概論」(昭和十三年、雄風館發行)、「經營學講話」(昭和十四年、高陽書院發行)、「賃銀論」(昭和十四年、千倉書房發行。十八年改版)、「小賣商廉賣問題」(國弘員人氏と共著—小賣問題研究叢書。昭和十四年同文館發行)の如き著作が、相踵いで公刊されたことも異とするに足らぬであらう。進んで右の他に、昭和十五年日本評論社刊行の「新經濟學全集」に、博士は「商工經營論」を執筆せられ、編書として「統制經濟下に於ける經營學」(昭和十六年、巖松堂書店發行)、「生産力擴充と經營合理化」(昭和十八年、日本評論社發行)、「經營經濟學」(昭和十八年、三省堂發行)、「企業形態の研究」(昭和十九年、日本評論社發行)、「戰時經營學」(昭和二十年、巖松堂書店發行)を

刊行された。「戦時経営學」の初版発行の日から一箇月を經過しない間に、博士が大空襲によつて罹災死を招かうとは、神ならぬ人間の誰が豫想し得たことであらうか。遺稿「工業經營論」が一種の phoenix となつて現はれようとは抑も何人が期待し得たことであらうか。

故博士の業績を辿つて茲に到ると「工業經營論」が日の目を見ることは、當然期待せらるべき事實であつたと云つても宜い。代表者を故博士に立てて來た經營經濟研究會は、本書の序文に「本書が經營經濟學の指導者としての先生の、長き學問的歩みの總決算である」ことを記してゐるが、亡き人にとつては然う云はれざるを得ないであらう。

さて本書の内容を繙くと、全卷は四編、十五章から成る。第一編工業經營に於ては、工業經營の意義及び目標、工場立地、經營規模、操業度、大量生産の五つの章が當てられる。先づ工業を組立工業 *Assembly industry* と進行工業 *Process industry* とに大別し、「經營經濟は經濟性を目標とする個別經濟である」(三頁)となし、經濟性の概念の本質としては「費用と給付との比較秤量」(四頁)を以てする。而して經濟性と収益性の關係は、収益性の目標が給付から費用を差引いた剩餘を最大ならしめるこ

とを期待するに在る點から、「經濟性と収益性とは同一のものでないが、しかしまた相排斥するものでもない。兩者は同時存在を許されるが、その存在する面を異にするものである。」(五頁) 工業經營は工業を營む經營經濟として、右の如き目標を有するものとせられる。次いで工場の立地條件を經濟的條件と非經濟的條件とに分ち、非經濟的條件として自然的條件、政治的條件、個人的條件の三を擧げ、經濟的條件として、原料費の低廉、交通の便、動力費の低廉、勞務の豊富低廉、消費地への接近、資本調達の有利といふ六を數へて説かれる。更に工場の規模の基準を論じ、大規模經營の利弊を顧み、進んでこれと操業度との關係を、シュマートレンバッハ教授の引例によつて明かにする。なほ大量生産に關しては、右の大經營と必然的關係を有するものでなく、「むしろ工場の専門化が行はれて、單一種類もしくは極めて少數種類の製品を繼續的に生産することを意味する。ゆゑに、今日往々用ゐられる單種多産の名稱の方がその本質を明示する。」(三〇頁)と限定し、大量生産の前提は工業經營の専門化もしくは特化であるとし、標準化に對する要請の生れる所以を指摘し、標準化或は單純化のもたらす諸種の利益を論ずる。本書の第一編は、かくして總論とも見られ

る部分で、工業經營に就ての基本概念が展開せられるのである。議論の多い基本概念を明快に克服して行く跡は到底凡手の及ぶところではない。

第二編以下は各論と名付けられるに適はしい部分で、茲には作業及び勞務管理、資材管理、工業計理の問題が取扱はれる。作業及び勞務管理の中に盛られる内容は、工業組織、テラーの時間研究、ギルブレスの動作研究、流れ作業、フォード・システム、タクト・システム、賃金形態等で、概して科學的管理法とその最近に於ける發展の經過が説かれてゐる。科學的管理法に關する文献は今日までわが國に幾多現はれたが、本書の如く簡潔に平明にその精髓を傳へたものは類例に乏しいのではないかと思ふ。

資材管理の編では、購買管理と倉庫管理とが技術的に詳説せられるが、これは従來の工業經營論に於ては殆ど顧慮せられなかつた分野である。實際上甚だ重要な分野を、本書は新に開拓して、學徒の反省を促したものと云へよう。この分野は今後一段と發展せしめて、アメリカで唱へる Industrial Engineering の如きものに高めなければならぬであらう。

終りの工業計理の編は、原價計算、經營比較、經營計

書（豫算統制）等の新しい會計學上の問題に當てられる。ドイツ流の經營經濟學が會計學と密接な關連を保つことによつて、特色を有することは學徒の知る通りであるが、本書はこの點ドイツ流に沿ふものと云ふことが出来る。而も分量に於てはこの編は全卷の約三分の一を占めてゐる。計算的思考が合理化の過程に缺くべからざる要素である以上、工業計理を示さない工業經營論は、その價値を減ぜざるを得なくなり、本書の如きは斷然群雞中の一鶴たる資格を示すと稱すべきであらう。

太平洋戰爭は日本の慘憺たる敗北に終つた。終戰二年を閲して講和會議は未だに開催されない。僅かに民間貿易の再開が許されたに止まる。貿易の再開の前提としては、必ずや工業が振興せしめられなければならない。工業經營の任務は未だ嘗て見ざる重要性を帯びる。かかる際、學問的情熱を死の直前まで保ち續けられた先達増地庸治郎博士の遺稿「工業經營論」一巻こそ、懦夫を起たしめる靈符たるものである。雷に人の死するやその言良しと云ふに止むべきでない。